

神戸学院カレッジ開講初年度の教育的効果

Educational Effect of Kobe Gakuin Super English in Its First Year

安田有紀子¹ 平井 愛²

(要約)

本学では、2016年後期よりグローバル人材育成の一環として英語学習に特化した「神戸学院カレッジ」が開講された。本稿では、神戸学院カレッジ開講までの経緯、理念と目標、開講初年度のカリキュラム紹介及び学生の英語力の変化について調査を行った。調査では約1年間でどの程度伸びが見られたかを調べるためにt検定を実施し、その結果、スコアに有意な伸びが見られた。また、特に顕著な伸びが見られた4名の学生にカレッジでの学びをどう捉えているかについてインタビューを行った。

(Abstract)

As part of Global Human Resource Development, a special English program called “Kobe Gakuin College” has been offered since 2016. The background of the program, educational philosophy and objective, and the curriculum in the first year are stated in this paper. Also, t-test was conducted in order to examine the changes in the students’ TOEIC scores. As a result, significant difference was observed in students’ progress. Furthermore, a follow-up interviews were conducted with four students whose scores significantly improved over the year.

キーワード：神戸学院カレッジ, グローバル人材育成, 英語学習, TOEIC

Key words : Kobe Gakuin College, Global Human Resource Development, Learning English, TOEIC

1. はじめに

近年、日本国内では各種教育機関、とりわけ高等教育においてグローバル人材育成のための方針を策定し、教育現場の英語教育改革から海外インターンシップの提携など多角的な視点から様々な取り組みが行われている。

本学においても英語多読・多聴教材を取り入れ、留学生との英会話などの機会を設けた「図書館留学」と呼ばれるプログラムが2011年度より開始され、グローバル化に対応できる英語力強化を進めてきた。また2014年度には共通教育センターが新たに開設され、共通教育科目においてグローバル教育に資する科目を提供することで学部の専門を超えてグローバル人材育成に取り組む体制を整えることが可能になった。そこで、共通教育科目を利用して英語力を伸ばしたいと希望する学生を育成し、全学的にグローバル人材育成に取り組むため、2016年9月より「神戸学院カレッジ (Super English Class)」が開講された。

本稿では、神戸学院カレッジが開講されるに至った経緯、その理念と目標、開講初年度のカリキュラム、神戸学院カレッジで学ぶ学生の英語力の変化と今後の課題について述べる。

2. 神戸学院カレッジ

2.1 理念と目的

先述の通り、神戸学院カレッジは本学におけるグローバル人材育成への取り組みの一環として開講に至った。本プログラムは「英語学習に特化したプログラムを開設し、英語力を伸ばしたいと希望する学生に対応した語学プログラムを提供するとともに、全学を挙げてグローバル人材の育成に取り組む」という理念のもと、(1) 交換留学可能なレベルまで英語力を高める教育プログラムを提供する、(2) 自主的に英語学習や異文化交流ができる英語で触れ合う空間をつくる、という2つの目的が定められた。(1)に関しては「神戸学院カレッジ」が、(2)についてはEnglish Plaza (い〜ぶら) が開設されたが、本稿では(1)に関するみ取り扱う。

本学では、学部によって多少事情は異なるが、ほぼ全学的に共通教育科目において英語の履修を必修と定めていない。英語以外の外国語のみを共通教育科目で履修し、卒業要件を満たすことが可能である。しかし、現状では中学校から高等学校にかけてすでに既習の外国語である英語を履修する学生は非常に多い。英語を履修する動機は学生によって大きく異なり、受講する学生の英語力に顕著な差が見られる科目もあるため、専門科目だけでなく英語も重点的に学び、英語力を向上させたいと考えている学生の希望がこれまで十分に満たされてきたとは言い難い。また、学部の垣根を越えて、英語力向上という同じ目標を掲げた学生が集い、ともに切磋琢磨できる環境づくりが必要であると考えられ、このような問題点が神戸学院カレッジの理念に反映された形となった。

また、本学では交換留学制度が設けられているにも関わらず、交流協定大学から設定された高い基準の英語力が大きな壁となり、近年留学生の受け入れのみが続き、本学からの

学生の派遣は数年足踏み状態であった。現在では、国際交流グループの尽力のおかげで新たに派遣留学制度や各種奨学金制度が加わったため、制度ができる前よりも学生を派遣しやすくなり、実際にそれらの制度を利用して交流協定を結んだ大学に長期留学する予定の学生もいる。それでもなお、本学の総学生数を鑑みると交換留学や派遣留学に向かう学生は多くない。留学や語学研修にかかる費用も海外へ向かう際の足枷となる要因の一つではあるが、それと同等に学生の英語力不足も大きな要因である。交換留学や派遣留学で求められる水準に到達することが必要であり、その目的を達成するために英語学習に特化したプログラムが必要であった。

このように、全学を挙げたグローバル人材育成という理念のもとで、明確に定められた目的を達成するために神戸学院カレッジを開講する運びとなった。

2.2 開講の経緯

全学を挙げてグローバル人材の育成に取り組む英語学習プログラムの導入を検討するため2015年4月に検討プロジェクトが始動した。検討プロジェクトは座長をはじめとし、各学部より1名及び共通教育センターより2名の総勢12名の委員で構成された。検討プロジェクト会議は2015年7月までのおよそ3ヶ月間であり、神戸学院カレッジ開講開始時期、運営、対象学部・学年、受講人数、受講科目、選考方法や到達目標について活発に意見交換がなされた。また一部の委員は他大学の先行例を調査するため、北海道大学の「新渡戸カレッジ」、近畿大学の「英語村」への視察に赴き、開講に向けての参考とした。

対象学部・学年は2015年開設のグローバル・コミュニケーション学部を除くすべての学部の1年次生とし、各キャンパス30名までである。当初、神戸学院カレッジは2016年4月の開講予定であったが、新規プログラムであることと、対象が一年次生であることを鑑みて、広報と選考方法の2つの観点を踏まえて2016年度後期授業からの開講となった。

まず広報については、神戸学院カレッジが新規のプログラムであり、新入生にプログラムの内容を知ってもらう必要があったため、入学時から前期定期試験までの期間を広報のために利用した。入学式で神戸学院カレッジ新規開講のチラシを配布し、前期授業開始後は共通教育英語科目を担当する教員に学生への案内を依頼したり、英語分野主任が説明会を行ったりなどし、新入生への周知を図った。

2.3 選考方法

選考方法は応募時における志望動機書と英語試験の成績の2点を利用した。選考方法と開講時期の関係を示すために、以下に1年次生の共通教育英語科目の履修について述べる。

本学では入学時に英語のクラス分けを行うために新入生に学力診断テストを受験させている。学力診断テストは、主に基礎的な文法理解を問うものである。学力診断テストの結果をもとに振り分けられたレベル別のクラスで新入生の大半が前期に「標準英語 Ia (主にリスニング・スピーキングが中心)」と「標準英語 Ib (主にリーディング・ライティングが中心)」の2科目を履修しており、「標準英語 Ia」の定期試験は統一試験として Ace

Placement Test を受験する。Ace Placement Test はリスニングセクションとリーディングセクションで構成されており、学力診断テストと比較すると神戸学院カレッジの選考方法として Ace Placement Test を用いる方がより適切とあると考えた。また、入学時や前期授業内での広報で神戸学院カレッジの募集について把握しており応募を希望する学生が、その選考に必要な基準が満たせるように、入学後最初の Semester で英語力向上に努め、その上で統一試験に臨めるという点も 2016 年度後期開講となった大きな要因であった。受講希望にあたっての志望理由書と前期統一試験の結果をもとに、偏差値を算出し、設定された偏差値基準を満たした学生を合格とした。結果として、神戸学院カレッジ第 1 期生は、ポートアイランドキャンパス 26 名、有瀬キャンパス 17 名であった。

2.4 開講初年度カリキュラム

2015 年当時、本学には 2 つの新設学部が存在していたため、新規教育プログラムのために共通教育科目を変更することは不可能であった。そこで、現状開講している科目を利用して読み替え科目として扱うことで神戸学院カレッジのためのクラスを設けることとした。なお、それらの読み替え科目については科目名の後ろに“Super English”を意味する (SE) の表記が付加された。以下に、開講初年度の履修科目とその内容を示す。

表 1 神戸学院カレッジ初年度開講クラス

夏季集中	後期授業	春季集中
チャレンジャー英会話 (SE) 実践英語 II (SE)	英文リーディング I (SE)	英会話 I (SE)

先述の通り、神戸学院カレッジ生は志望理由書と 2016 年度前期統一試験 (Ace Placement Test) の結果をもとに選考された。8 月上旬に合否が発表された後、カレッジ生は入学時より履修登録をしている通常の共通教育科目「標準英語 II a」と「標準英語 II b」以外に表 1 で示された 4 つの科目を受講した。

「チャレンジャー英会話」は通常の共通教育英語科目でも毎年夏季集中講義として開講されている科目であり、英語ネイティブ講師によるコミュニケーション中心の内容となっている。「チャレンジャー英会話 II (SE)」も同様にネイティブ講師によって授業が行われた。カレッジ生が選考されて初めて受講する科目であり、初めてメンバーとも顔を合わせる機会でもあった。自己紹介をはじめとして、自身の日常生活について英語で伝えることを目標とした授業内容であり、総じて英語力を向上させたいと希望する学生の集まりであるため、英語でのコミュニケーションを通してお互いに打ち解け合うのに適したクラスであったといえよう。

「実践英語 II (SE)」ではまず、TOEIC テストについて、問題の構成や特徴など TOEIC 受験に関わる基本的な事項の説明に始まり、カレッジ選考直後の自身の力を測定するために模擬テストを受験した。その後 TOEIC のテスト形式に慣れていくために TOEIC リスニ

ング・リーディング問題を解き、講師の解説を通して学ぶ授業内容であった。

後期に入ると「英文リーディング I (SE)」が開講され、通常の授業のように週1回授業を受けるようになった。カレッジ生は様々な学部より選考されているため、両キャンパスともに同科目を開講するのに適切な曜日時限の設定には困難が伴ったが2016年度はポートアイランドキャンパスでは火曜日4時限目、有瀬キャンパスでは同3時限目に開講された。「英文リーディング I (SE)」においても夏季集中講義の「実践英語 II (SE)」の引続きとして TOEIC 対策中心の授業内容であった。

春季集中講義では「英会話 I (SE)」が開講され、リスニングの強化を行うと同時に、中学校から高校で学ぶ英文法を復習した。夏季集中講義からの数ヶ月間で基本的な英文法の知識と理解度が低いことと、TOEIC で高得点を取得するための語彙力が乏しいことが課題として見出されたため、英語コミュニケーションにも各種英語資格対策にも応用できるよう、再度基礎力を見直す内容とした。

2.5 教育的特徴

神戸学院カレッジでは、「英語学習に特化したプログラムを開設し、英語力を伸ばしたいと希望する学生に対応した語学プログラムを提供するとともに、全学を挙げてグローバル人材の育成に取り組む」という理念のもと、英語力向上のための教育プログラムの提供及び自主的に英語学習や異文化交流ができる場をつくることを目的としている。英語力を高めることを念頭においているが、カレッジ生は英語が主専攻ではなく、それぞれの専門分野の学習にも日々励まねばならない。限られた時間の中で、英語学習のための時間確保や英語力向上に対するモチベーションを継続させることもプログラム提供に際しての大きな課題となった。また、高い英語力を身につけるだけでなく、社会人として国内外に羽ばたける人材になれるよう、対人コミュニケーションスキルの向上にも重きをおくべきであると考えた。これらの課題を考慮に入れて、開講初年度の神戸学院カレッジでは、授業内と授業外において、英語力向上と対人コミュニケーションスキル向上のためにいくつかの教育的アプローチを試みた。以下に、初年度の教育的特徴を示す。

(1) ペア・グループワーク

授業内では、協同学習の理念 (Johnson, Johnson, & Holubec, 2002) をもとにペア・グループワークを多く取り入れた。TOEIC の問題を解く内容の授業では通常、学生が個人で問題に取り組むことが要求される。カレッジのペア・グループワークでは、取り組んだ問題の解答の根拠となる理由を話し合うなどして、教師が介入する前に学生の間で自らの理解度を確認したり、解答の解説をしたりするなど、互いの学びを支援しながら、自らの学びを深める努力を促した。また、英語力向上、とりわけ TOEIC 高得点取得という同じ目標を共有している仲間がペア・グループワークでコミュニケーションを取りながら学ぶことで、学習意欲やモチベーションの維持を図った (杉江, 2016; 杉江他, 2004)。

(2) 定期勉強会の開催

授業以外に昼休みや空き時間を利用して、勉強会を開催し定期的な学習時間と機会を確保した。2.3で触れたとおり、夏季集中講義から後期授業の期間で基本的な英文法の理解と語彙力強化の必要性が確認できたため、勉強会では単語テストや文法問題を重点的に取り組んだ。

Carter (1987) は、英語力が発展途上の学習者は、暗記や繰り返しを通して英単語を効果的に多く学習できると指摘している。また、英語力の乏しい学習者には語の意味を明確に指導することが効果的であるとも言われている (Curtis, 2006; Nation, 2005)。そこで、TOEIC 頻出英単語とその日本語訳が書かれた単語シートを配布し、毎回の勉強会で単語テストを行い、かつ自分のペースで学習できる単語学習ワークシートに取り組むなど繰り返し頻出単語に触れて学習を続けることで語彙力の強化を図ることにした。さらに、TOEIC テストにおける出題内容の検証を通して中学英文法をマスターすることの重要性が指摘されていることから (田中, 2017)、中学英文法を総復習するための補助教材を用いて勉強会や自主学習時間に中学英文法を解き直し、理解不足の文法項目を復習することで基礎力の見直しを行った。基礎の確認と並行して、TOEIC テストに準拠した文法問題にも数多く取り組み、誤答については再考した上で正答の根拠を理解するまで繰り返し解くことを習慣づけた。

(3) 学習マネジメントと対人スキルの向上

勉強会開始当初は日程調整や教材準備の関係から教師主導となることがほとんどであったが、後に、グループリーダーを決め学生のみで集まり、勉強会を行うようにもなった。学生が主体となって勉強会への参加を呼びかけるなど、英語学習の習慣づけをサポートしあい、自らの学びに責任をもたせた。またグループリーダーは定期的に交代することで多くの学生が、勉強会のためのスケジュール調整やグループをまとめることを通じてリーダーシップを学ぶ機会を得ることとなった。なお、各自の都合に合わせて、どちらのキャンパスでも勉強会や TOEIC 受験に参加できるようにすることでキャンパス間での交流も促した。頻繁に顔を合わせてコミュニケーションをとりながら共に学習することを通して、心地よい学びの場所となり、それが自分の居場所であるという帰属意識をもち、カレッジ生として学んでいるというプライドが芽生えたと言及する学生も現れた。

(4) 授業外英語学習ソフトの活用

開講初年度より授業外の時間を有効に使って英語学習を行えるよう、カレッジ生には英語学習アプリが提供された。アプリをダウンロードして登録すると、パソコンのみならずスマートフォン上でも空いた時間を利用して英語学習が可能となった。

(5) プロGRESSレポートの活用と面談

学習状況を記録するPROGRESSレポートを利用することで、自身の学習進捗状況や内

容を把握して、次回への学習計画を立てることを学んだ。また、担当教員はカレッジ生との個人面談を通して学習内容や克服すべき点などについて一人一人の学習者の状況に応じたきめ細やかなサポートを提供した。

3. 開講初年度カレッジ生の英語力の変化

上述の通り、開講初年度においては英語力向上のための英語学習時間の確保とモチベーションの維持を課題として掲げ、それらをサポートすべく、授業内外で様々な教育的アプローチを試みた。そこで、カレッジ生の TOEIC スコアの推移をもとに初年度において教育効果がどの程度見られたのか、及び実際にスコアを伸ばすことができた学生がどのようにカレッジでの学びを捉えているかについて調査を行った。

3.1 対象と方法

神戸学院カレッジ1期生は、2017年2月に行われた春季集中講義期間中に TOEIC IP テストを受験しているが、これ以外では必ずしも同じ時期に受験しているわけではなく、各自の都合に従って TOEIC 公開テストを受験しているため受験回数は学生によって異なり、対象者の平均受験回数は3.5回であった。また様々な事情によりカレッジを辞退した学生や本稿での調査に必要な回数の TOEIC 受験ができていない学生もいた。本稿ではそれらを除いた29名のカレッジ1期生を対象とし、カレッジ開講当時から本稿執筆期間（2018年3月）の間に受験した TOEIC スコアの中から時系列に準じた最低点と最高点を用いて、対応のある t 検定を実施した。なお、最低点を取った受験日から最高点を取った受験日の平均期間は9.2ヶ月であった。

また、カレッジ開講からの1年間で TOEIC スコアが100点以上伸びた4名の学生に対して同意の上で簡単なインタビューを行い、カレッジでの学びをどのように捉えているのかについての回答を得た。

3.2 結果と考察

カレッジ1期生が受験した TOEIC の最低点と最高点の記述統計を表2に記す。最低点と最高点を比較して、平均が95点上昇した。

表2 1期生の TOEIC スコアの伸び ($n = 29$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>
最低点	440.34	85.59	205	570
最高点	535.34	109.78	275	830

注：最低点は開講から本稿執筆期間までの間に受験したスコアの最低点・最高点を示す。

対応のある t 検定を行った結果、最低点と最高点の間には有意差が認められた ($t(28) = -5.650, <001, r = .73$)。

神戸学院カレッジは、ある一定水準の英語力を満たし英語力を高めることに対して強い志をもった学生で構成されている。そのため、TOEIC テスト対策に重点を置きながら学習することによって短期間で TOEIC スコアにある程度の伸びが見られることは予想されたが、今回の調査で実際に英語力が顕著に向上していることが確認できた。また約1年間で300点以上スコアを伸ばして800点を超える学生も見られた。スコアを順調に伸ばした学生に共通する主な点として、勉強会への定期的かつ積極的な参加と単語や文法問題の反復練習量が挙げられる。既述のとおり、カレッジ生は学部授業の他にアルバイトや課外活動など多忙な日々を送っており、限られた時間の中でいかに英語学習のための時間を確保し継続するかが英語力向上の鍵となっている。定期的に行っていた勉強会で一定の学習時間を確保できたこともスコアに有意な伸びが見られた一因であると考えられる。

また、約1年間の間でスコアに特に顕著な伸びが見られた4名の学生に任意でインタビューを行い、自身のスコアアップの要因やカレッジでの学びをどのように捉えているかについて以下のような回答が得られた。

学生A	<ul style="list-style-type: none"> ・ TOEIC 対策に特化した文法問題にたくさん取り組んだ。 ・ 強制的に学習するのが苦手な頭に入らないが、カレッジでは仲間と楽しみながら学習できるので頭に入りやすく、何より英語学習が面白いと感じる。
学生B	<ul style="list-style-type: none"> ・ カレッジでの課題がスコアアップにつながった。とにかく単語や文法問題を何度も解くことで、できる問題が増えたので初めは苦痛だったリーディングパートも苦痛ではなくなってきた。 ・ 共通の目標をもつ仲間と共に切磋琢磨しながら高め合えるため自分一人で学習するより意欲が高まった。 ・ わからないことを教えてもらえ、自分が理解できていることを共有しあえる環境である。
学生C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文法が苦手だったので重点的に取り組んだ。 ・ カレッジに入る前は、自分の意見を伝えるのが苦手だったが、自分の意思をしっかりと伝えられるようになった。自分がどんな風に何を勉強したいのかを伝えられるようになったことで、勉強方法を見つけることができ、勉強のための時間も有効に使えるようになった。 ・ 課題などが多くて専門の勉強やバイトとの両立は大変だが、頑張った分だけ TOEIC のスコアにも結果が出るので頑張ってよかったと思える。
学生D	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題を怠らないことが第一だと感じ、空いた時間などでも単語を勉強したり英語の本を読んだりした。 ・ 英語学習の楽しさを知ることができた。

インタビューを受けたすべての学生が、カレッジで行った単語や文法の課題に取り組んだことをスコアアップの要因として挙げており、授業内外でサポートしてきた内容が結果に直結していると感じていることがわかる。またペア・グループワークなどを通してお互

いの学びを支え合い、切磋琢磨し合うことで学習意欲の高まりを感じられたようである。さらに、カレッジ開始前後を比較して、カレッジ開始前よりも自分の意思を相手に伝えられるようになったと自身の心的な変化について述べる学生もいた。仲間とのコミュニケーションや教員との面談でのやりとりを通して、自分にはどのような勉強方法がよいかを相談し、模索しながら学習の自己管理ができるようになり、努力が結果に現れたことへの達成感を得られたようであった。学生インタビューから、神戸学院カレッジ開講初年度に試みたいいくつかの教育的アプローチが学生の英語力向上及び学習意欲やモチベーションの維持と深く関係していることがわかった。

4. まとめと今後の課題

本稿では神戸学院カレッジが開講されるに至った経緯、理念と目標、開講初年度のカリキュラム、カレッジ生の英語力の変化について述べた。英語力に関する分析については、本学ではTOEIC対策に重点をおいた共通教育科目「実践英語Ⅰ～Ⅳ」を開講しているが、英語学習に特化した選抜クラスである神戸学院カレッジと一般の共通教育科目では履修者の背景や学習時間、内容ともに大きく異なるため、本稿では比較対象とせず、カレッジで受講する学生のTOEICスコア推移についてのみを提示した。開講初年度ではあったが、カレッジ生は全体として英語力に向上が見られた。

本稿執筆時、すでにカレッジ2期生の学習も始動している。手探りで進んできた初年度の改善点を見直して、さらに高水準の学習の場を提供したいと考えている。これまでは1期生のみであったが、現在では1期生、2期生合同で勉強会を行っている。同学年の横のつながりだけでなく、学部を超えた縦のつながりも大切にすることで、対人スキルをさらに高めてほしいと願っている。また、英語学習に関しても学年を超えて、切磋琢磨し合うことで、常に目標を設定しながら一つ一つ達成していけるように学習管理能力も高めていけるようにしたい。

最後に、2018年夏には本稿執筆者が開拓に携わる新規海外研修プログラムが開始される予定である。アメリカ合衆国ニューヨーク州立大学フレドニア校で行われる研修では、将来の長期留学を視野に入れることができるよう大学の授業をいくつか聴講できるプログラムとなっている。また、大学キャンパス内で学生、教職員を始めとする地域の人々に対して日本文化や自分の専門分野の日本事情について英語でプレゼンテーションを行う発信型のプログラムでもある。大学の授業聴講や英語での発信能力が求められるため、他の研修プログラムとは異なり、研修参加には高い英語基準を設けている。TOEICで高得点を取ることを目標とするのではなく、その先を見据え、英語を使って何ができるのか、何をしたいのか、どのように世界に発信できるのかを考えることができる様々な機会を提供したいと考えている。今後、年度を重ねるごとに神戸学院カレッジの取り組みや学生の英語力の変化について学内に広く発信し、その理念でもある「全学をあげたグローバル人材育成」への取り組みに貢献していきたい。

参考文献

- [1] Carter, R. (1987). *Vocabulary: Applied Linguistic Perspectives*. London: Allen & Unwin.
- [2] Curtis, M.E. (2006). The Role of Vocabulary Instruction in Adult Basic Education. *Annual Review of Adult Learning and Literacy*, 6 (3). 43-69.
- [3] Johnson, D.W., Johnson, R.T., & Holubec, E. (2002). *Circles Of Learning* (5th ed.). Edina, MN: Interaction Book Company.
- [4] Nation, I.S.P. (2005). Teaching Vocabulary. *Asian EFL Journal*, 7 (3). 47-54.
- [5] 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅ほなみ (2004). 『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部
- [6] 杉江修治 (2016). 『協同学習がつくるアクティブ・ラーニング』明治図書
- [7] 田中誠 (2017). 「TOEIC テストから考える中学英文法の重要性和指導内容」『長崎国際大学論叢』17. 13-21.